

ボイマンス美術館所蔵 ブリューゲル『バベルの塔』展

東京都美術館 2017.04.18～07.02 国立国際美術館（大阪） 07.18～10.15



「ピーテル・ブリューゲル父」は、16世紀フランドル（現在のベルギー王国）（北方ルネサンス）を代表する画家で、美しい自然を壮大に描き故郷の諺や子どもの遊びを図解し、想像力豊かに空想世界を描いた。

彼の画業はおよそ20年間と比較的短いですが、初期には素描の専門家として作品を制作し、風刺や教訓をこめた寓意画を描く一方、伝統的な宗教画を独自の手法で表現した。画伯は、自然に包まれて暮らす農民の姿を題材としたことから「農民ブリューゲル」や「民衆の画家」と呼ばれていた。尚、同名の長男と区別するために「父、老、一世」と表記されている。

「ボイマンス美術館」はオランダ・ロッテルダムにあり、今回同館が改修と新館建設工事に入るために本邦では24年振りに公開される展覧会で、他におよそ「90点の作品」が出品されている。

『バベルの塔』 1563年頃 板・油彩 サイズ 60.0 x 74.5cm



巨匠「ブリューゲル」が3度描いた代表作の一つで、『旧約聖書』の創世記に登場する、天にまで届くほどの伝説の巨大な塔を、海辺の風景の中に描いた油彩画である。

構図は、巨大な建築物で地表にヌッと立って遠く海にまで及び、上階は雲に突き抜けているアーチで、内部はローマのコロッセオの構造、各階を支える壁はゴシック聖堂で内部まで細密に描かれて、建物の形態、色彩、人物、風景の描写などが誠に緻密で特筆に値する

秀逸の出来栄であると評価されている。画中の手前にいるのは、この計画を押し進めようとする「ニムロデ王」の一行で、塔の周りで働いているのは蟻のように小さく描かれた人々で、その比較によって、「塔」がどれほどの大きさかを見る者に訴えかけてくる実に“迫力のある作品”である。